

# 「ドラマ教育」におけるパフォーマンスの意義と観客の存在

— 英語学習の現場から —

ムーディ 美穂

## Drama Education and Performance on Stage — Enhancing Communication Skill in English —

Miho MOODY

### 1. はじめに

演劇を通して経験できることは多い。通常、演劇は「観るもの」であって、役者でもなければ「演じる」機会というのには限られているであろう。観て楽しむという受け身の立場から、見られる側に立つということは、「人前に自分自身を晒す」という勇気と、作品の解釈や、それをした上でのセリフの暗記、そして演技、と多大な準備を余儀無くさせる。が、自分の声と体を使って表現したことが観客に伝わり、大きな拍手を得るとき、その経験は演者に大きな喜びと深い学びをもたらしてくれる。

教育の現場に演劇の要素が取り入れられて久しい。座って教師の話の聞き、暗記をして試験に備えるという教師主導型の授業とは相對するドラマの授業形態は、「アクティブラーニング」や「協働学習」の範疇に入れられるべきものである。特に外国語学習の現場においては、コミュニケーション能力の向上を図る教授法の一つとして、ロールプレイ (role play) やインプロバイゼーション (improvisation) の有用性は広く認められている。また、自分の考えや学んだことを聴衆の前で発表するプレゼンテーション能力の重要性も様々な分野で叫ばれている。これらに注目が集まるのは、ほぼ世界常識的な「日本人のコミュニケーション下手」というレッテルを払拭し、進み続けるグローバル化に対応できる人材を育てるといふ願いが、文部科学省指導要領の中で謳われている文言としてだけでなく、実際の教育現場や企業、家庭内にも浸透してきているからであろう。

本稿では英語コミュニケーション能力を高めるツールとしての

ドラマ教育について、主に学習者が観客の前で発表することから得る学びと、観客の役割について考察する。また、筆者が本学で実践している活動を例に取り、練習から発表に至るまでのプロセスを報告する。

「ドラマ教育」なのか「演劇教育」なのか、また活動内容の名称にも重複するところがあり、用語に関しては曖昧さが指摘されている<sup>(1)</sup>。ここでは「ドラマ教育」と統一し、また個々の活動内容に關しては、必要に応じて「アクティビティ」や「ワーク」など、そして見る側を「オーディエンス」や「観客」、発表に關しては、「発表」や「パフォーマンス」、「プレゼンテーション」などを適宜使い分けることにする。

## 2 ドラマ教育における学びとパフォーマンスの捉え方

「ドラマ教育」の理念と実践が広く日本に紹介されたのには、富田博之<sup>(2)</sup>や岡田陽<sup>(3)</sup>による功績が大きいであろう。ヨーロッパや北米に比べ、実践している教育現場はまだ少数であるが、その概念——演劇的知を通して子どもたちの創造力や表現力を伸ばすという基本的理念は踏襲され、近年では様々な活動が報告されている。アプローチの違いによって、アプライド・ドラマ (Applied Drama)、プロセス・ドラマ (Process Drama)、クリエイティブ・ドラマ (Creative Drama) などのカテゴリーがある。それらを総称して一般的に「ドラマ教育」(Drama in Education) と呼ぶことが多いが、いずれも目指すところは生徒の内面的、社会的成長である。アプライド・ドラマを推進する小林 (二〇一〇)<sup>(4)</sup> はドラマ教育を「参加

型学習媒体」の総称と捉えているが、この考え方は「流派」を超えてドラマ教育に共通する理念である。架空の状況 (いじめ、移民問題など) を設定し、学習者は自らコンテキスト (context) の中に立ち、心と体を使って考えることにより場面を展開していく。このように立体的に考えることによって、社会問題や道徳、文学作品を体験的に理解する。重要なのは、学びの過程 (process) であり、授業活動の内容は即興的である。学芸会のような観客の前の発表 (presentation, performance) は必要としない。観客を必要とする理由は、「学び」は見せるためのものではない、という概念である。人前で発表することは、生徒たちに不要な緊張を強い、また観客ウケするような、学びとは関係のない「演技」を生徒にもたらしことにもなる。それらは全て体験的な学びの妨げになる、という考え方である。<sup>(5)</sup> (Wax, 一九六七)

「観客」の前での発表に対する批判がある一方、発表を含む演劇の芸術性を重視し、それがドラマ教育の大切な要素であるという意見も少なくない。「芸術」としてのドラマを重視する考え方には二つある。一つはドラマ (Drama または Theatre Education) を、美術や音楽教育と同じように教科として取り入れるべきだ、という主張である。

ホーンブルック<sup>(6)</sup> (Hornbrook, 一九九八: 一〇) はイギリスにおけるドラマ教育が、芸術面を軽視していることを批判している。ドラマの発表は生徒たちがただ単に、学校行事のために練習をするのではなく、演じる役や作品を充分理解し、自分たち独自の解釈を取り入れ、専門家の演技の指導を受けた上で発表すべきであり、その一連の活動がより深い学びをもたらすと主張する。ニコルソ

ンとテイラー (Nicholson & Taylor, 一九九八: 一一二) は、ドラマ教育においては「発表をすること」を意識させることにより、作品の理解とその表現に注意を向けさせ、生徒たちは、どのような言葉を、どのように発信すれば、自分の表現したいことと、その価値が伝えられるか考えるようになると主張する。また、芸術面に重きをおいたドラマ活動は、言葉だけでなく、演者の動きや舞台デザインなど、芸術的・文化的な側面について探求する機会を生徒たちに与える、としている。

もう一つは、「発表する」という要素が、学習者に到達すべきゴールとなり、それが学習動機を高めることに繋がるといふ点である。六十年代に来日し、以来日本の大学生に英語演劇を指導したヴァイア (Via, 一九七六) は、ドラマが学習者に英語のコミュニケーションツールとしての側面を喚起させると共に、言語自体にも意識を向けさせると主張している。

A play is written for communication between actor and actor and audience and actor. ... They can become involved in the situation and discover the how and why of the language. ... If it is announced at the beginning of the course that the play will be performed on a given date, the students will have a goal to reach. Students with a definite, interesting goal progress faster and further.

文法、語彙知識の標準は高いが、実践を伴わない日本の英語学習状況において、ドラマ的活動の導入は新たな発展を生みだすと考えられる。学習者は授業で学んだ知識を自分の声と体を使って

試す場を与えられ、一連の活動を通し、言語が多様な状況や場面で様々な側面を見せ、伝達を助けてくれることを体感する。そして観客の前で自分を表現するという経験は、コミュニケーションと共に、言語のメタ知識へ学習者の意識を導くのである。次章では、外国語学習における舞台発表の効果について、映像とは違う「劇場」における「観客」の役割について触れたい。

### 3. 演劇における観客の役割

「観る」ということだけでも演劇は多くのことを私たちに与えてくれる。素晴らしい舞台を観た時の感動はいつもまでも心に残るだろうし、一緒に観た友人たちとその芝居について話し合う時間は楽しい。感動という経験は、生きる力にもなり得る。主人公に共感して涙したり、お腹を抱えて笑ったり、悪役に対してはらを立てたりする、その時の感情を人は覚えているものである。過去に起こった出来事を呼び起こし、その時の負の感情を癒し、楽しかったことを思い出させ、明日からの活力を与えてくれることもあるであろう。

「観て感動する」という受動的経験は、映像媒体からも可能である。では、デジタルネットワークが普及し、映画やテレビ、DVD、ビデオを時と場所を選ばず観ることができる現代において、演劇の特性とはなんだろうか。

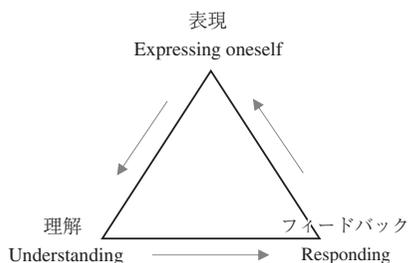
勝田 (二〇一五) は映像メディア視聴者と演劇の観客との違いを表す要因は、舞台に立つ人と舞台を見ている観客が同時に同じところに存在する「現前性」であるとし、観客を演劇の成立に欠

かせない積極的な存在として捉えている。演劇は興行中、毎日違う観客の前で繰り返される。演者は、全く同じ演技を毎日提供するのではなく、同じ作品であっても、その日来る観客の反応を受け止めながら演技をする。演者もまた観客を「見て」いるのである。青山（二〇一七）は、アテネで観たルドルフ・ヌレエフの（ライモンダ）における演技が、他の日に観たものとは全く違ったと感じた経験から「舞台は生き物である」と主張する。

舞台芸術作品は、その日その日によって、毎日、微妙に、そして確実に、違うのであって、それは、一つには、……毎日違う「受け手」が、「作り手」を通じて、いわば「作り手」と共に、舞台芸術作品の創造に参加しているからなのです。……舞台芸術においては、「作り手」と「受け手」は、一体となっているのです。この、〈同時全体一体性〉こそが、舞台芸術の独特の魅力の根源の一つなのです。……実は、役者もまた、観客を見て演劇を調整している点で、観客の方を向いているのですから、役者と観客、一般的に言って、「作り手」と「受け手」は、双方向にまなざしを交しあっているのです。（一九）

劇場で、観客は他の観客と共に舞台上で俳優が表現する一連の動作を受容する。どのような感想を持つかは人によって千差万別であろう。が、一斉に笑い、ときにはブレイクが起こり、拍手が鳴り止まぬとき、観客は他の人々と共に、演劇の一部となり積極的に舞台に向かってフィードバックを投げかけている。

この演劇に特有な観客と演者のコミュニケーションの機能は、ドラマ教育、特に外国語学習の現場において大きな効果をもたらすものであると考える。ただ単に暗記してきた文章をオーディエンスの前で誦んじるのではなく、自分の伝えたいことを、今の前にいる人たちに理解し、共感してもらうためにはどうしたらいいか。どのような言葉を使い、どのように発話し、その発話を助けるために、どのようなサブテキストが必要か、学習者は考える。パフォーマンスがもたらす学習効果は、以下のようなモデルに集約される。



自分たちに「表現したい」事柄があるとき、学習者はそれをオーディエンスに向かって伝える、または伝える努力をする。表現は決して表現者から一方的に発信するものではない。オーディエンスは発表者からのメッセージを受け取り、自分たちの感想を発表者に返し、発表者はそのフィードバックをオーディエンスからの「表現」として受け止める。この三角形の伝達体制が形成されると

き、発表者とオーディエンスの間にコミュニケーションが成立する。

二十年間シェイクスピア劇などのドラマ教育を実践した清水（一九九九・五八）は「演ずることは最も強力な学習手段」と述べている。筆者自身、英語コミュニケーション授業の一環としてドラマ活動とその発表をおこなってきた。作品解釈、台本作成から始まり、読み合わせ、立稽古、リハーサル、発表と続く一連の活動の中で、学生たちの表現力が著しく伸びるのは、本番まで二週間を切った頃に行うドレスリハーサルの後である。この日は、衣装や小道具等を揃え、本番と全く同じように行うため、本番の発表に來られない友だちや家族が観に來ることになっている。たとえ近しい人々の前であっても、リハーサルの日にちが決まると、学生たちの緊張は一気に高まり、今までの練習の成果を最大に見せようと練習に熱が入る。そしてリハーサルの後、観客からフィードバックを受け、自分たちのパフォーマンスを振り返り、次の日からの練習に活かしていくのである。

学生たちの間には当然、意欲やモチベーションに温度差があり、アルバイトや他の授業などですべての練習に出られない者もいる。が、リハーサルを境に、練習に対する態度が違ってくる。ただの稽古場が、観客を迎えることによってはじめて「舞台」となり、自分が何を伝えたいかを改めて認識するからであろう。次に筆者がゼミ学生と毎年参加しているオーラルコミュニケーション・フェスティバル (Oral Communication Festival) と、そこから得た経験と気づきについて述べたい。

#### 4. 実践報告

大学英語教育学会 (JACET) 主催のオーラルコミュニケーション・フェスティバル (OCE) は、一九九六年度に始まり、二〇一九年度に第二十四回目を迎えた。JACETのオーラルコミュニケーション研究会に所属する教員が、それぞれの大学で指導している学生と共に年に一度集まり、英語学習の成果としてのパフォーマンスを披露する。コンテストのように優劣を競うものではなく、学生が普段の教室から一歩外に出て、他大学の学生と教員の前で発表し、また、他校の発表を鑑賞し、お互いに感想を述べ合うものである。二〇一九年度同志社女子大学での開催では、本学と、南山大学、神戸市外国語大学、同志社女子大学、文教大学、東京工芸大学、仙台青葉学院短期大学、鳥取環境大学の参加があった。

ここでは、筆者のゼミが二〇一七年度に参加したオリジナル劇と二〇一九年度のアガサ・クリステイのミステリ『ナイルに死す』(Death on the Nile) をもとに作成した劇を例にとり、創作劇「クリエティブ・ドラマと既存の作品を使用するスクリプト・ド・ドラマ (Scripted Drama) の意義について考察したい。

##### 二〇一七年度 クリエイティブドラマ “Where My Mum Fears to Tread”

ドラマ教育におけるクリエイティブドラマの解釈は、子供たちが自発的にドラマワークを通して体験的に学ぶ過程重視の活動である。学習者が自分たちで台本を創作して発表するものをクリエイティブ・ドラマと呼ぶこともあり、オーラルコミュニケーション

研究会では後者の解釈を取り入れている。

創作を開始するにあたって、「毎日のニュースや生活の中で、少し変だ、とか不思議に思うことは何か」について考えることから始め、そこからテーマを絞っていった。学生たちが選んだのは「LGBTQ」の話題と、中東における内戦問題という二つのトピックであった。「LGBTQ」を選んだ学生の疑問は「同性婚が認められている国が増えている。ゲイだからと言って結婚が許されないのはおかしいと思うので、同性婚には賛成だ。だが、実際に結婚するとすると、他の人も関わってくる。家族はどのように受け止めるのだろうか」というものであった。そして中東問題を選んだ学生は「毎日のように、中東で起こっている事がニュースで流れている。悲惨な状況を知りながら、日本にいる自分は何もできていないのが歯がゆい」という気持ちを劇で表したいと言った。学生らはこの二つの全く違うテーマを、以下のような物語にまとめ上げた。

内戦地帯でジャーナリストとして活動する日本人男性が、恋人である男性カメラマンと一緒に実家に帰ってくる。彼は自分たちが同性愛者であることを家族に隠している。母親は派手好きな性格で、久しぶりに帰る息子のためにパーティを開こうとするのだが、内戦地帯から帰ったばかりの息子はそのような気持ちになれず、口論となる。贅沢な生活をし、内戦のことに無関心な母親のことを息子は非難する。が、後で母親の友だから、母親は息子のことを心配し、毎日ニュースを見ていること、危険な場所には行かせたくなかったが、本人のしたいことなら、と諦めて行かせた、ということを知られる。息子は母親に謝り、自分がゲイで

**Oral Communication Festival**  
**WHERE MY MUM FEARS TO TREAD**  
 ~人を見かけや出身国で判断してしまうことはありませんか?~

**Kenji (南ひかる)**  
 ケンの母、自由気ままに生活しながら中東に行ってしまったケンに心配している。

**Mr. Gee (奥木道)**  
 パーティプランナー、ゲイであることを隠さず、常にハイテンションに生きている。年齢不詳。

**Aisha (藤枝美咲)**  
 ある中東の国出身、ケンの新居社でインターンシップをしている。ケンとアリが恋人同士であることを知っている。日本が大好き。

**Mrs. Tom (富田綾音)**  
 実業家でゴシップが大好きな人。いつもふざけているように見えるが、まじめな一面をのぞかせることもある。

**Ken (田中カイト)**  
 ある中東の国でNGOを立ち上げる。現在ジャーナリスト、放浪癖があり自由人。

**Ali (三枝弘尚)**  
 中東アジア出身、ケンの新居社で働いている。ケンとは恋人同士。債権だがお調子な面も

**STORY**  
 中東のある新聞社では、アイーシャ、アリ、ケンが働いている。ある日、ケンは実家に一時帰国することになり、恋人であるアリも連れていくことに決めた。しかしケンの母、憲子はケンがゲイであることを知らない。そこでケンとアリは憲子を誤魔化そうと、ある作戦に出る...

**12/16**  
**13:00-17:00**  
 名古屋外国語大学 701教室

あることを告白するが、母親はすでに気づいていた。そして謝るのなら、自分がゲイであることではなく、ゲイである自分を恥じて、それを隠していたことを謝ってほしい、と告げる。

ストーリーを四つのシーンに分け、それぞれの執筆を一人〜二人の学生が担当した。台本が出来上がると、配役をし、自分の役についてのキャラクターライゼーション (characterization) と、今までのような人生を歩んできたのかを考えるパーソナル・ヒストリー (personal history) を作成する。それが済むと、早速読み合わせ、立ち稽古 (blocking)、通し稽古 (rehearsal) へと進んでいく。自分たちで作った作品であるので、当然のことながら、セリフや話の流れを一番理解しているのは自分たち自身である。学生たちには他人が作ったセリフを暗記する時とは違う安心感と自信が

ある。クリエイティブ・ドラマの利点は、作品が自分たちのオリジナルであるため、観客に理解して楽しんで欲しい、という気持ちが強くと、それがより舞台からの「伝達」に注意を喚起することである。創作の段階から「四十代後半の女性ならこの気持ちなどを表現するだろうか。どんな言葉を使うだろうか」などと考えながらセリフを作っていた。そして舞台での練習が始まり、自分の声と体を使って演じると、また新たな気づきがあり、台本に修正を加えていく。考えたセリフを、実際に自分の声と体を使って言ってみると、座って考えていた時とは違う発音がある。不自然に感じたり、他にもっと適切な言葉を思いついたりする。

シリアスな感じにはしたくない、という学生らの希望から、最後は母親の「でもパーティはさせてね」というセリフで終わるコマデータータッチの作品ができあがった。<sup>(8)</sup>タイトルはE・M・フォスター (E. M. Foster) の『天使も踏むを恐れること』(Where Angels Fear to Tread) をもじったものである。

### 【二〇一九年 Scripted Drama 「ナイロ」死す】(Death on the Nile)

既存の作品を使用するものをスクリプト・ドラマと呼ぶが、今回は原作をもとに学生が台本を作成したので、クリエイティブ・ドラマの要素もある。全体をいくつかのシーンに分け、担当箇所を決めて台本を書く作業は前述のものと同じであるが、推理小説であるため、いくつか困難なことがあった。登場人物が多いことと、犯罪のトリックなど話が複雑で観客に伝わりにくい、ということである。観客にストーリーの流れや登場人物の性格が伝

わらなければ楽しんでもらえない。そして最後の謎解きでは、観客にあつと驚いてもらいたい。そのためには、セリフを憶えてはつきり大きな声で発音するだけでなく、何故そのセリフを言うのか、どのように言うべきか、一つ一つよく考えて、舞台上の相手に向かって伝える必要がある。このような時、上述したキャラクターデザインやパーソナルヒストリーの作成が役立つ。この登場人物は何歳か、どのような教育を受けてきたのか、職業は会計士だが、何故この場にいるのか、同じ場所にいるクライアントに対してはどのように思っているのか、など。演じるキャラクターの内面について学生が考えやすいように、インタビュー形式で質問をし合うこともある。

エジプトに向かう客船の中で起こる殺人事件の登場人物十四人を紹介するため、学生らは、一人ずつ舞台上に登場し、船のクルーと乗船の受付をしながら簡単な会話を交わすことで、自分の身方や性格を簡単に表現するというシーンを設けた。

(例)

Crew 1 : Hello, Madam, may I have your name?  
 Otterbourn: Salome Otterbourn. I'm a writer.  
 Crew 2 : Of course, you are the writer, aren't you! Are you writing something new?  
 Otterbourn: Yes, it's nearly ready.  
 Rosary : Mum, you are not writing anything. You are always drunk.

双方の劇で共通しておこなったことは、登場人物の複雑な関係を理解してもらうために、パンフレットを作成したことである。

出演者である学生の写真と役柄の簡単な説明、そしてあらすじを載せた。これをあらかじめ観客に配布して読んでおいてもらう。多少の予備知識があることで、観客はこれから始まる劇に対して期待を持ってくれているようにだ。

演じる時に、その役柄やコンテキストに関して多くの「なぜ」を発し、それら質問について考えることで、役を自分に近づけることができる。そのようにして学んだ言葉は、自分の言葉として長く学習者の中に定着する。

伝えようとする気持ち、セリフの間の取り方、歩き方などの動作、衣装や音響効果などのサブテキストに注意を向けさせる。日常生活でのコミュニケーションは、言葉だけでなく、これら多様なサブテキストを含むことに学生は気づくのである。

学生の省察レポートを見ると「達成感」、「伝えること」、「積み重ねが自信につながる」、「チームワーク」等について述べているものが多かった。学生たちはバイトや授業の合間を縫ってリハールの時間をやりくりし、また「うまくいくのだろうか」、「自分の足が引く張るのではないか」といった不安を抱えなが



2019年度 Death on the Nile

ら数ヶ月の練習をこなしていく。たった一度だけの発表のために費やした努力が報われたときの喜びと達成感は自信につながり、さらなる学習動機となるであろう。

## 5. まとめ

ドラマを使った外国語学習において、舞台発表がもたらす効果について述べてきた。その根底にあるのは、まず発表者として自分と観客の間の距離を認識することである。距離が離れているほど、伝えるための工夫が必要となる。慣れ親しんだ教室から飛び出し、なんでも察してくれる友達ではない、初めて会う人々を前に表現を行うことは、恐怖ともなる。平田（二〇一二）は、

「伝えたい」という気持ちはどこから来るのだろう。私は、それは、「伝わらない」という経験からしか来ないのではないかなと思う。（二二八）

と言う。この「伝わらない」経験を前提とするのが舞台発表ではないだろうか。平田はさらに言う。

ではどうすれば良いのだろうか？ ……ここに、演劇、あるいは演劇的な授業の大きな役割がある。演劇は、常に他者を演じることができる。実際の体験教育ほどの効果はないかもしれないが、異文化、他者への接触をフィクションの力を借りてシミュレート（疑似体験）することができる。…

そしてもう一点、演劇は、自分を出発点とすることができ、無理に自己を変えるのではなく、自分と、演じるべき役柄の共有できる部分を見つけていくことによって、世間と折り合いをつける術を子どもたちは学んでいく。

自分の伝えたいことをはっきりとさせ、練習を重ねることが自信につながる。演じる役に自己が寄り添うことによって、発する言葉の理解は深まり、作品への共感が生まれる。体と声を使って表現したことが観客に伝わった時の喜びは大きく、その経験は学習者の中で大きな財産となるであろう。今後も、英語学習の場において舞台発表の可能性を探っていきたい。

## 注

- (1) ドラマ教育における用語や呼称の曖昧さについては中山(三)が指摘している。
- (2) 日本の演劇教育を論理的、体系的にまとめ、また実践や児童演劇脚本の執筆もおこなった日本におけるドラマ教育の第一人者である。著作「日本演劇教育史」は一九八四年一月号から一〇八九年十月号まで雑誌『演劇と教育』掲載された著述をまとめたものである。(佐々木、二〇一八)
- (3) 玉川大学名誉教授(二〇〇九年没)。Brian Wayの「Development through Drama」を高橋美智と共訳した。
- (4) 渡辺(二〇〇九)は、演劇的活動から得られる学びを「演劇的知」と呼ぶ。詳しくはJ・ニールンズとの共著『教育方法としてのドラマ』を参照。
- (5) 発表(Performance)に対する批判についてはFleming(一九九四)が多数引用している。
- (6) David Hornbrookは一九九〇年#1 Inner London Education Authorityにおいてドラマ査察官を務めた。(Hornbrook, 一九九八)
- (7) OCFの詳細については、ムーディ、浅野、野村(二〇一九)を参照。オーラル・コミュニケーション研究会の活動は「オーラル・コミュニケーション

ンの理論と実践』(三修社)と『オーラル・コミュニケーションの新しい地平』(文教大学出版)にまとめられている。  
(8) あらすじはムーディ、浅野、野村(二〇一九)で詳述している。

## 引用文献

- 青山昌文(二〇一七)『舞台芸術の魅力』NHK出版
- 勝畑田鶴子(二〇一五)『演劇における演者と観客間の相互作用に関する一考察——ポストドラマ演劇の可能性——』尚絅学院大学紀要第55号
- 小林由利子・中島裕昭・高山昇・吉田真理子・山本直樹・高尾隆・仙石桂子(二〇一〇)『ドラマ教育入門』図書文化社
- 佐々木博(二〇一八)『日本の演劇教育』晩成書房
- 塩澤泰子、野村和宏、大川道代(編著)(二〇一三)『オーラル・コミュニケーションの新しい地平』文教大学出版
- 清水豊子(一九九九)『芸術形式の変換——文学教育からドラマ教育へ——』マパフォーマンスが生み出すもの』千葉大学教育学部研究紀要Ⅱ 人文社会科学編
- JACETオーラル・コミュニケーション研究会(編)(二〇二二)『オーラル・コミュニケーションの理論と実践』三修社
- 中山夏織(二〇〇七)『Drama in Education——ドラマ教育を探る12章』特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク
- 平田オリザ(二〇一一)『分り合えないことから』講談社現代新書
- ムーディ美穂、浅野亨三、野村和宏(二〇一九)『表現力と聴衆の存在——コミュニケーション能力を高める舞台発表の可能性——』名古屋外国語大学論集第五号二四七—二八—
- J・ニールンズ、渡辺淳(二〇〇九)『教育方法としてのドラマ』晩成書房
- Fleming, M. (1994). *Stirring Drama Teaching*. London: David Fulton Publishers Ltd.
- Hornbrook, D. (1998). *Drama and Education* — in Hornbrook, D. (ed.) *On the Subject of Drama*. London: Routledge
- Nicholson, H. & Taylor, R. (1998). *The Choreography of Performance* — in Hornbrook, D. (ed.) *On the Subject of Drama*. London: Routledge
- Via, R. A. (1976). *English in Three Acts*. The University Press of Hawaii
- Way, B. (1967). *Development through Drama*. Atlantic Highlands, N.J. Humanities Press

## Where My Mum Fears to Tread

### Cast

Ken ..... A journalist working in the middle east  
Aisha ..... An apprentice  
Ali ..... A camera crew  
Keiko ..... Ken's mother  
Mrs. Tomita ..... Keiko's friend  
Mr. Gee ..... A wedding planner

### Scene 1

*In a country in the middle east, in a small office of a newspaper company. Aisha enters.*

Aish: Hey boss.

Ken: Aisha! How's it going?

Aish: I'm OK. How about you?

Ken: Busy. The deadline is tomorrow. No chance...

Aish: Is there anything I can do for you?

Ken: Sure! Can you check with the Tokyo office if they are available to see me next Monday?

Aish: Of course. You are going to go to Tokyo, aren't you? I'm so jealous.

Ken: You want to go to Japan, right?

Aish: I always have. It's my dream. Ali's going to miss you a lot.

Ken: He's coming with me.

Aish: Is he? As a partner?

Ken: Of course. He is my cameraman.

Aish: No, are you going to tell your mum that you and Ali are together?

Ken: Oh, no. Definitely no.

Aish: It's difficult isn't it, in Japan, to be a gay couple.

Ken: I guess so. Particularly for my Mum.

*Ali enters.*

Ken: Hey! Are you OK?

Ali: Yeah, I'm all set. Passport, ticket..., the only thing I have to do is to book a hotel.

Ken: You don't need to book a hotel. You can stay with me at my mum's house.

Ali: Are you sure? So does she know about us?

Ken: No, of course not.

Ali: So, I don't think that's a good idea.

Ken: I don't want you to stay in a hotel by yourself.

Ali: I have to, otherwise, I'm gonna feel so uncomfortable...

Aish: Difficult to pretend like you're just friends, isn't it? If you stay together.  
Ali: Yeah, if I stay with you it would be difficult. I'd rather stay somewhere else.  
Ken: Hey, I've got an idea.  
Aish,  
Ali: What?  
Ken: *pointing at Aisha* you come with us.  
Aish: What? To Japan?  
Ken: Yes.  
Ali: Oh, I know what you are thinking!  
Aish: That's great, but why?  
Ali: Because you are going to be Ken's girlfriend.  
Aish: Oh...! That's insane!  
Ken: I'll pay for the flight and you can stay with us. And you help me with my work while you are there.  
Aish: I don't wanna tell a lie to your mum.  
Ali: You always said you wanted to go to Japan.  
Aish: Yes! ...But, do you think that will work?  
Ali: Of course it will.  
Ken: It has to.  
Ali: What do you think?  
Aish: Well... it's like, my dream comes true!  
Ken: Good! So it's all settled, right?  
Aish: Yes! Thank you!  
Ali: Don't forget, you're gonna be Ken's girlfriend, okay?  
Aish: I can't believe it! Oh, I have to go pack my stuff. *Off stage*  
Ali: Take it easy, okay?  
Ken: Hey let's get out. I need a break.  
*Ken and Ali go off stage*

**Scene 2**

*In a living room of a house in Japan*

*(SE) Bell*

Tom: Hi! I've heard.  
Kei: Have you heard?  
Tom: Yes! Your son has got a girlfriend!  
Kei: Yes, at last! I've been waiting for so long. And she is coming with Ken next week!  
Tom: Wow! That's so exiting!  
Kei: It is!

Tom: What's her name?  
Kei: That's the thing. I can't remember. Something with Ah..., or Ai...  
Tom: Something with Ahhh?  
Kei: Ahijo!  
Tom: Ajillo? That's the food.  
Kei: Yes, and that's her name!  
Tom: Ajillo, with garlic and olive oil?  
Kei: and mushrooms swimming in it.  
Tom: That's her name? It's so foreign!  
Kei: She is foreign. Anyway, I'm busy today because the party planner is coming.  
Tom: I see. You are organizing an engagement party for Ken and the girlfriend, aren't you?  
Kei: Ahijo. Yes. Actually, the guy, the party planner, he is gay.  
Tom: Wow! Is he? How do you know?  
Kei: I just do.  
Tom: What's his name?  
Kei: Again, I don't remember. I just call him Mr.Gee.  
Tom: Mr. Gay?!  
Kei: No! Mr. GEE!  
Tom: Can I stay?  
Kei: Of course you can!  
*(SE) Bell*  
*Mr. Gee enters.*  
Mr. G: Hello, ladies. How are you?  
Kei: Hi, Mr. Gee. You look awesome.  
Mr. G: Thank you.  
Kei: Oh, this is my friend, Mrs. Tomita.  
Tom: Just call me Tom.  
Mr.G: Hello Mrs. Tom.  
Kei: You don't mind, do you?  
Mr. G: Of course not.  
*They sit down.*  
Mr. G: So have you had a chance to think about...?  
Kei: Yes, I tried, but it's so difficult. There are so many choices.  
Mr. G: One thing I could recommend is...  
Tom: Mr. Gee, can I ask you something?  
Kei: Ayane san! Don't be rude!  
Tom: I can't help it!  
Mr. G: Please. Go ahead.

Tom: Are you...  
Kei: Are you...  
Mr. G: Am I gay?  
Tom,  
Kei: ARE YOU?!  
Mr. G: Yes, I am.  
Tom,  
Kei: Wow! I told you! I knew it!  
Kei: Oh, I'm sorry.  
Tom: I'm really sorry. I didn't mean to be rude.  
Kei: Yes, you are! You've been so rude!  
Tom: So are you!  
Mr. G: No offence taken. Don't worry.  
Kei: So Mr. Gee. Is that a secret?  
Mr. G: No. It's no secret. I don't like secrets.  
Tom: So, do your parents know about it?  
Mr. G: Yes, they do now.  
Kei,  
Tom : I see!  
**Kei's phone beeps.**  
Kei: Excuse me. I got a message... from my son!  
Tom: What does he say? What does he say?  
Kei: He's coming back with his partner...  
Tom: The girlfriend?  
Kei: Yes, and another partner.  
Tom: Another partner? He has two?!  
Kei: No, no! His work partner, a cameraman.  
Tom: A cameraman! So cool!  
Kei: But the thing is, the cameraman is called Ali.  
Mr. G: What's the problem?  
Kei: Sounds like he is Arabic or something.  
Tom: Of course he is! They are in the Middle East!  
Kei: I know! But I cannot imagine that my son will bring someone from the Middle East!  
Tom: I understand. And the girlfriend is from the middle east, too. Right?  
Kei: Oh, no. I didn't think about it! I don't know what to do? What shall I do?  
Tom: They are Arabians?! They are always on the news recently, aren't they?  
Mr. G: Ladies, I don't understand. Why is it such a big problem?  
Kei: Because! They are Muslim!

Mr. G: They probably are.  
Tom: People from such a dangerous place! *To Keiko* Will you be alright?  
Kei: I don't know. I'm so nervous!  
Mr. G: Just relax. Don't worry. It will be just fine.  
Tom: How do you know?  
Mr. G: Because they are just people, like anybody else.  
Kei: What can I do?  
Mr. G: Just treat them well. Welcome them. Cook nice meals. Treat them as you would anyone else.  
Tom: We can sort something out! I'll help you.  
Mr. G: I'm sure you will. Sorry I have to go now. I have to see another client.  
Kei: Oh, sorry, Mr. Gee.  
Mr. G: Don't worry. I'll come back sometime next week. OK? *Off stage*  
Tom: Don't worry. They must be nice people. Because your son's a great boy!  
Kei: I think so.  
Tom: We'll welcome them, in an Arabic sort of way!  
Kei: But how?  
Tom: Come on! I have an idea.  
*Kei and Tom go off stage.*

### Scene 3

*A couple of days later. In front of Kei's house. Ken, Ali and Aisha are at the doorstep.*

Ali: So it's here.

Ken: Yes, it is.

Aisha: It's great.

*Ken rings the bell. Then suddenly the door is flung open. (SE: Arabian music) Kei and Tom enter stage left, dancing. They are wearing hijab.*

Ken: Wow, wow, wow! Stop!

*Kei and Tom ignore him. They keep dancing.*

Ken: Mum! What's going on?! Please stop!

*The music stops.*

Kei: Why?!

Ken: Why? What are you doing?

Tom: We are welcoming you. Welcome! Arabic people! Welcome to Japan!

Ken: Just take off the thing, please.

Kei: It's hijab!

Ken: I know! Take them off! Please. *Goes to Ali and Aisha.* I'm sorry. It's embarrassing.

*Kei and Tom take off hijab.*

Kei: So, are you happy?

Ken: It's much much better.  
Tom: So..., you must be Ali, right?  
Ali: Yes, nice to meet you...  
Ken: This is my mum and this is...  
Kei: Mrs. Tomita.  
Tom: Just call me Tom!  
Ali: Hello, Miss Keiko. Hello, Tom.  
Kei: And, you must be...  
Tom: Ajillo!  
Ken: What did you say?  
Kei,  
Tom : Hello, Ajillo!  
Aish: No, no! My name is Aisha. Not Ajillo!  
Tom: No? Are you sure?  
Aish: Yes! My name is Aisha, not a Spanish food.  
Kei: It's tasty, though.  
Ken: MUM!!

**Scene 4**

Ali: I think Aisha and I will go and have a look around the neighbourhood.  
Aish: I think that's a very good idea.  
Ken: No, no. Please don't go. Just stay with me, okay?  
Tom: Maybe, I can take Aisha and Ali to their bedrooms.  
Kei: It's okay. I'll do that. Ali, Aisha, this way, please.  
*Kei, Ali and Aisha go off stage.*  
Tom: I could do that. I know everything in this house.  
Ken: Of course you do.  
Tom: You don't look happy.  
Ken: Maybe because I'm not.  
Tom: Why?  
Ken: It's been just too much.  
Tom: Your mum and I just tried to make you happy.  
Ken: That's the thing. You didn't have to. Who are you anyway? Why are you always here?  
Tom: Come here.  
Ken: What??  
Tom: Just come over here and sit down!  
Ken: Alright, alright. I will.  
Tom: What are you thinking of? Do you have any idea how much your mother worried about you?!

Ken: Me going to the Middle East? Yeah, I guess, but I had to. I had a good reason that I had to go.  
Tom: “Good reason”? Really. And then you don’t care how hard it has been for your mum, just to wait for you to come back.  
Ken: Excuse me? Off course I care.  
Tom: I’ve always been here, to be near her. Because I’m her friend.  
Ken: Let me tell you something. You live in Japan, and you only know the peaceful part of the world. You know nothing about the other part of the world, like the Middle East, how much people suffer and struggle just to live every day.  
Tom: So you think that I am ignorant, do you? If I am, so you are!  
Ken: I’ve never been ignorant. I always think about people, children living in these war zones, thinking about how I can help them.  
Tom: No matter how hard you try, you cannot change anything. You should know. Just come back! Stay with us! Together with your partner! That’s what your mom wants. Understand??  
Ken: I do. But I will follow the path I’ve chosen. There is no turning back.  
Tom: You are a fool. *Walks toward the door.*  
Ken: You are right. I am fool and I’ve been ignorant, but I know now that what you’ve done to my mum.  
Tom: What?  
Ken: Being a friend, and I appreciate that. And thank you.  
Tom: Well then, I’ll see you at the party, okay?  
Ken: Party!? What party?  
Tom: Your engagement party, you and Ajillo! Oh, I have to go. Bye! *Off stage*  
Ken: Oh no! *Off stage*

## Scene 5

### *In Ali’s bedroom*

Aish: Hey, are you okay?  
Ali: Yeah, and you?  
Aish: That was awkward.  
Ali: Yes, it was.  
Aish: They meant to be good. They seem to be nice people.  
Ali: Even though they call you “Ajillo”?  
Aish: I know. That’s funny. Ken’s upset.  
Ali: He is. And his mum, too.  
Aish: How are you feeling?  
Ali: What do you mean?  
Aish: Being in Japan, I mean, being together with Ken. I guess it’s so difficult to keep your relationship secret.

Ali: It's not easy to be a gay anywhere in the world.  
Aish: I understand. If my brother was gay, my dad would kill him.  
Ali: Sometimes I wish we could do whatever we want to do as a couple.  
Aish: Like going out, going to a nice restaurant, or clubs, that kind of stuff?  
Ali: Just walking around together in a park, not worrying about other people, people staring at us.  
Aish: Just do! Don't give a toss about these people! Do what you want to do.  
Ali: I wish I could. But if that hurts other people, I'd rather not.  
Aish: You should be happy. Be more selfish!  
Ali: Sometimes, me being happy makes other people unhappy. Besides, I don't want to rush. And I'm happy where I am now.  
Aish: But...  
Ali: Hey, let's get out. I think Ken and his mum need sometime together by themselves.  
Aish: I think so.  
Ali: Come on. I'll take you to Harajuku.  
Aish: Harajuku? Oh, I wanna go to Takeshita Street.  
Ali: Takeshita? What's that?  
Aish: You don't know? You can get really nice crepes.  
Ali: Crepe?  
Aish: Come on. Let's go! *Ali and Aisha go off stage.*

### Scene 6

*Living room. Keiko enters, then Ken enters.*

Ken: Mum, you got a minute?  
Kei: What? Actually I have to cook dinner.  
Ken: Just sit down, for a minute. Please.  
Kei: Okay.  
Ken: I'm sorry I didn't tell you...  
Kei: You didn't tell me that you were gay?  
Ken: What? Mum, did you know?  
Kei: Did you think that I didn't?  
Ken: I've never told you..., but how? How did you notice?  
Kei: It's easy. Looking at you and Ajillo, and that boy.  
Ken: But how!?  
Kei: Maybe because I'm your mum.  
Ken: I'm sorry.  
Kei: Sorry for what?  
Ken: Because I am...  
Kei: Don't be sorry for what you are. Be sorry for telling me a lie.

Ken: I just didn't want to hurt you.

Kei: You never hurt me. Whatever you are, gay, or not gay.

Ken: You did so much for me as a single mum. I know it wasn't easy. I didn't want you to know that I'm gay, because it would make you unhappy.

Kei: I'm happy whatever you are. Just don't tell me a lie. That hurts.

Ken: Sorry.

Kei: Just be yourself. That makes me happy.

Ken: Sure.

Kei: Now, I really have to start cooking.

Ken: Can I help?

Kei: If you want to.

Ken: Mum, I tell you what. I feel really good. I feel so much better.

Kei: Me, too.

*Ali, Aisha, Tom and Mr. Gee enter.*

All: Don't forget the party!

*Curtain.*